

まち

No.21 2023年 秋号

発行日：令和5年10月27日
発行：日本大学理工学部まちづくり工学科教室
☎03-3259-0531(学科事務室)
発行責任者：後藤 浩(教室主任)
編集担当：八藤後 猛、牟田聡子
制作：株式会社 ムーンドッグ

巻頭言

まちづくり工学科の10年を振り返って、 後世に残せるレガシーとしてのまちづくりを考える

特任教授 八藤後 猛



このたび、小木曾裕先生から引き継いで、牟田聡子先生とともに本誌編集担当となりました。

図らずも担当となってからの一号目は、2013年に第一期生を迎えて以来の「まちづくり工学科10周年記念誌」ととなりました。先日「10周年を迎えて」をテーマに、退職された先生も交えて座談会を開催し、まちづくり工学科がまさに社会から求められて創設された経緯、そして第一期生を迎えてからもさまざまな社会の動きに対応しながら今日へ至った、貴重なお話をうかがうことができました（お話の内容は次ページからの特集をご覧ください）。振り返ればこの10年は、東日本大震災復興、そして経済活性化推進としての「インバウンド」による外国観光客の激増、その直後のコロナ禍による人々の行動変容がまちづくりに及ぼした大きな変化など、わが国におけるまちづくり事業の新たな転換期でもあり、激動期でもあったことがわかります。

さて話は変わりますが、私の専門分野である「福祉まちづくり」について振り返ってみました。1964年の東京パラリンピックにおいて、わが国の出場選手と外国との選手との交流をきっかけに、わが国の福祉まちづくりが始まったことは知られています。まちづくりにおける貴重なレガシーだったと思います。そして10年を振り返れば、大きなトピックとなるのは東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会ではなかったでしょうか。わが国では30年前に創設した現行バリアフリー法、法制化以来の大きな動きがあった10年と思います。まちづくり工学科創設とほぼ時を同じくして競技大会の誘致が決定してから、「新国立競技場基本構想国際デザイン競技」におけるザハ・ハディド案では賛否両論が巻き起こりましたが、そのことが結果的には競技場について多くの人々の関心を集めたと思います。結果的には国内2グループの対決となりましたが、どちらもユニバーサルデザインを前面に

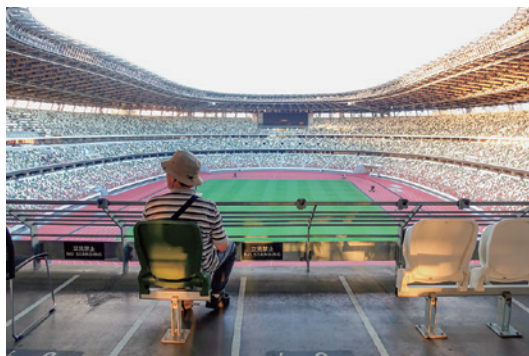
contents

巻頭言	1
特集 座談会：まちづくり工学科の軌跡	2
学部4年生・修士1年生へ「就職活動へ向けて」	11
令和5年度前期「まち」行事・イベントカレンダー	12
教職員・学生の活躍	15

打ち出してきたことは、1964年競技大会を知る者として感慨深いものがありました。このような国際的な行事が開催される国では「外国の人が来て、文化的に恥ずかしくない」ものを用意しようという意識がはたらくと思います。1970年の大阪万博では、公共施設に初めて「車椅子トイレ」がおめめしたということも万博のレガシーだったかも？ しれません。

TOKYO 2020に向けては、設置基準が厳しい国際パラリンピック委員会の国際基準（IPC）が初めて取り入れられ、国交省もインバウンドに対応したホテル旅館等のバリアフリー化、鉄道駅のホームドアの設置を一気に推進しました。特筆すべきなのは、1980年代からその必要性が当事者から叫ばれていながらも実現しなかった、スタジアムや音楽ホールにおけるサイトラインの確保（車椅子使用者席の前の人が立ち上がっても視線を妨げない設計）が、あっさりバリアフリー法の標準設計となったこと。TOKYO 2020が新たなまちづくりを生み出したといっても過言ではありません。

来るべき、まちづくり工学科20周年記念誌では、「その後の10年はさらに質の高いまちづくりが実現していったね」と振り返られる10年になることを願ってやみません。



国立競技場 サイトラインの確保された車椅子席
(約250席、それでも全席の0.5%弱) 2023年8月23日筆者撮影

座談会 まちづくり工学科の軌跡

1. 新学科開設の背景

八藤後 本日は、お集まりいただきましてありがとうございます。この座談会では、主にまちづくり工学科開設時のお話を伺いますが、学科開設後のお話になりましても構いません。よろしくお願いいたします。

横内 「そもそも、なぜ“まちづくり”の学科ができたか？」ということですが。2000年代に入って少子高齢化が著しく顕在化し、受験生も減ってきた。そういう社会情勢の中で、理工学部としては35年間変わっていない学科構成を、社会状況に合うように再編を考えようとした。それが2000年代の中ごろ。滝戸俊夫先生（当時、物質応用化学科教授）が学部長になり、学部次長の井上勝夫先生（当時、建築学科教授）が中心となって「日本だけではなく欧米も含めて、これからの世の中で何が産業として、あるいは興味として出てくるのか」ということを、大手シンクタンクに依頼して調査してもらっ

た。半年後に出て来た報告には、「これから希望的な分野が3つある」とあった。ひとつは“先端医療”関係。高齢化もあるし、世界の人口も増えているから、これからいろんな疾病なども出てくるだろうと。

岡田 当たっていますね、それは。現在で言えば、新型コロナウイルスにも当てはまる。

横内 「先端医療関係は理工学部に入っているかもしれない」と、シンクタンク側は言っていた。2つめは、“情報技術”関係なんです。これは、今まさに。十数年前、もちろん当時もコンピューターの時代ではあったけれども、もっと行くだらうと。まだFacebookも無かったけど、これからはSNSみたいなものが発達するだろうと。それから3つめが、“地域融合”。地域や人間関係などのコミュニティづくりのようなこと。この3つが有望な分野であるというので、理工学部執行部も考えた。先端医療関係は、とても一学科が扱うような人材や金額じゃつくれない。でも、情報技術関係は理工学部でも何とかできるんじゃないかということで、それが結果的に応用情報工学科になった。それから当時は、いろんな国のまちで人種問題や暴動等の事件があり、わが国でも町会活動の不活性化や空き家問題などがあって、コミュニティが機能しないいろんな問題が起きていた。ですから、健全なコミュニティづくりがまちには絶対に重要だと。空間づくりと生活づくりだね。にぎやかな暮らしをつかっていって幸せな光景をつかっていこうという“まちづくり”の理念が、そこで出されたわけです。

八藤後 そうすると、広い意味での世界平和とか、そういうことまで念頭に入っていたということですね。

天野 私が“まちづくり”と言い出したのはもうちょっと前。2001年、一度東大に戻った私が二度目に日大へ来て、横内先生に挨拶に行ったら「なんで戻って来たの？」と聞かれたので、「実は、景観まちづくり工学科が作りたいです」と。それで「あなた、何言ってるの？」と言われたのが、たぶん最初。そのときは“景観”がくっついてたけど、私が日大に来た理由の半分は、そういう学科をつくりたかったから。

岡田 2008年度に理工学部にはサブメジャー^{*}制度ができて、2009年度に社会交通工学科（現 交通システム工学科）と海洋建築工学科の合同で「景観サブメジャーコース」を設置しましたが、あのとき、私は海建で海洋景観計画という授業を持っていた。天野先生も交通で景観の授業を持っていた。景観というのは分野横断的な学問だから、それに関係する両学科の科目を束ねて景観サブメジャーコースを設置しました。そもそもサブメジャー制度というのは、学科を増やしたくても設置認可が下りないだろうというところから始まったのかな。すぐに新学科をつくるのは無理かもしれないけど、サブメジャー制度がそういう機運を高めていくことになるんじゃないかと。私は景観サブメジャーコースの組み立てを横内先生と天野先生から任命されたのですが、それが新学科開設に向けた動きの始まりでした。

天野 理工学部は学科ごとに独立性が高いので、学科横断をより活発にしたい。例えば、電気工学科の授業を土木工学科の学生も受講できるようにしたら良いんじゃないか。しかもメジャーをあげるということをインセンティブにしてつくろうというのが、サブメジャー制度の最初のところなんです。ある学科の専門科目の科



横内 憲久 日本大学名誉教授 | よこうち・のりひさ

1972年 日本大学理工学部 建築学科助手
1979年 同 海洋建築工学科専任講師
1992年 同 海洋建築工学科教授
2009年 同 建築学科教授
2013年 同 まちづくり工学科教授
2016年 同 まちづくり工学科特任教授
2017年 退職

※サブメジャー

専攻学科（メジャー）以外の学科科目も、その学問体系を維持しながら、さらに幅広く学べるようにした他学科科目を含めた授業科目群。専攻学科の学問を修得しながら、より幅広い視野と実践性が培える。

目群（サブメジャーコース）を他の学科の学生が履修するとそのサブメジャーを取れるんだけど、景観サブメジャーコースは海建と交通の科目群を取れば景観サブメジャーをあげますよ、というルールにしたんですね。

岡田 それまでのサブメジャーコースは、学科横断ではなかったんですね。だから景観サブメジャーコースは、サブメジャーとしての本質的な理になっっているアプローチだったと思います。

横内 景観サブメジャーコースが、まちづくり工学科ができた下地にあるとは思うんだよ。確かに、景観について専門にやっていたのは天野先生と岡田先生なので、それが結果として新学科に発展したよね。さらに言うと、理工学部1学年の定員2020人というのが厳しくなった。少子化で、そんなにたくさん受験生がいなくなった。だから、定員の多い既存学科の定員は減らし、減じた定員分を補うように、新しい2学科をつくって、学部全体の定員は変わらないようにしようと。だから、理工学部の定員の総枠を守るといのが学科新設のひとつの引き金であり、世の中的に言えばだんだん専門の枠が融合し始めた、というのが最初ですね。

2. 学科開設への紆余曲折

岡田 でもそこで逆風が吹くんです。要は当時、地方大学が疲弊してきていて、大都市の大学・学科の新設は困難な状況だった。天野先生が文部科学省へ事前説明に行ったのが2012年1月。その前に文科省へ相談に行くと、「そもそも、高校生に“まちづくり”という学科名が馴染むのか」ということと、「その学科を卒業したら、就職先がどれくらいあるのか」ということなど、学科新設の妥当性につ

サブメジャーコース一覧表（2009年度）

整理番号	設置学科	名 称	設置年度
1	一般教育教室	環境ライフサブメジャー	2009年度
2	一般教育教室	社会コミュニケーションサブメジャー	2009年度
3	一般教育教室	文化教養サブメジャー	2009年度
4	土木工学科	災害管理サブメジャー	2008年度
5	土木工学科	地球環境サブメジャー	2008年度
6	社会交通工学科	交通工学・計画サブメジャー	2008年度
7	建築学科	建築工学基礎サブメジャー	2008年度
8	海洋建築工学科	海洋環境学サブメジャー	2008年度
9	機械工学科	ものづくりサブメジャー	2008年度
10	機械工学科	自動車サブメジャー	2008年度
11	機械工学科	計測と制御サブメジャー	2008年度
12	精密機械工学科	精密機械工学サブメジャー	2008年度
13	航空宇宙工学科	航空宇宙工学サブメジャー	2008年度
14	電気工学科	基礎電気工学サブメジャー	2008年度
15	電子情報工学科	情報工学サブメジャー	2008年度
16	物理学科	基礎物理学サブメジャー	2008年度
17	物理学科	先端科学基礎サブメジャー	2008年度
18	数学科	解析学サブメジャー	2008年度
19	社会交通工学科 海洋建築工学科	景観サブメジャー	2009年度
20	社会交通工学科 機械工学科 精密機械工学科 電子情報工学科	ITS（インテリジェント社会交通）サブメジャー	2009年度

いての裏付けを数字で示せと言われた。それをわれわれはひとつひとつ対応していったんです。これが至難の業。そういう対外的な困難がある中で、次は理工学部執行部から「新しい“まちづくり学科”は、既存の土木工学科や建築学科とは被らないようにしてほしい」という話になり、いかに差別化を打ち出すか。その双方向からのせめぎ合いの中で、カリキュラムの構築をしたんですね。

天野 いくら既存の学科の受験生が少なくなっても、到底、理工学部が定員を減らすということがまかり通る時代ではなかったからね。

横内 そう。「理工学部の定員を減らす」と言えば、文科省は絶対喜んでOKと言うはず。大学がどんどん増えている時期でしたから。でも定員を減らしたら、理工学部だけではなく日本大学の経済バランスが崩れますから。

八藤後 人的資源、建物、資産、設備とか、そういうものが2020人定員で出来上がっているわけですから、それを維持していかななくてはならないということもあ

りますよね。

天野 だから“新設”ではないんですよ。つまり、理工学部の再編をしている。「今まで12学科で切っていたのを14学科に切り直します。土木・交通・建築・海建という土木・建築分野の中から“まちづくり”を切り分けているだけで、理工学部で教えている内容が抜本的に変わるわけ



岡田 智秀 教授 | おかだ・ともひで

1998年 日本大学理工学部 海洋建築工学科助手
2003年 同 海洋建築工学科専任講師
2011年 同 交通システム工学科准教授
2013年 同 まちづくり工学科准教授
2015年 同 まちづくり工学科教授



2012年5月に初めて作成した学科案内チラシ



2012年5月に理工学部が作成した新設学科紹介のパンフレット

ではない。決して新学科創設ではなく、理工学の分野の切り分けをしているんです」という説明を、文科省にはしたんですよ。

横内 申請する側としては楽でしたよ。新設だったら、たぶんものすごく審査が厳しいと思うんです。でも今の話を文科省にしたら、「こういう学科を追加したいという届出で良い」と。

天野 文科省に「届出で良い」と言わせるために、どれだけ気を遣って説明したか……。

岡田 ただやはり、ハードルは高かったですよ。

横内 そうだね。「定員100人がどこへ就職するんだ、根拠を書け」と言われてしまった。

岡田 そんなのわかりっこない。それでまずはいろんな学科の卒業生で、大手のゼネコンやコンサルタントで働いている人に会って「どういう学生だったら採ってくれますか？」というヒアリングをしたんです。当時は、合意形成というのがあまり企業に浸透していなかったのですが、コミュニケーション能力があるとか、合意形成の技術に長けている人がいると、すごくありがたいという話になりました。その延長で、“まちづくりワークショップ”という授業が誕生したんですけれども。そのほかには国家資格ですよ。『資格取得は大丈夫なのか?』と言われました。だからせめて、土木や建築の国家資格が得られる最低限の科目は

満たしましょうと。ところで、学科定員の100人ってどうやって決まったんですって？

天野 土木から40人、建築から30人。

横内 海建から10人。

天野 交通から20人だったかな。

横内 それで100人になった。

岡田 ああ、既存学科の定員を減じる分、100人。

天野 もうひとつは、やっぱり理工学部だから3桁だよなと。

横内 そう。でも最初は2桁の数を言っていたよな、80人とか。

天野 120人とか80人とか言っていて、真ん中に落ち着いたんじゃないかな。

横内 新学科だから80人にしたかったけれど、理工学部として80人は無いということになって、そうするとやっぱり3桁。それで、一番少ない100人。ということで、これは簡単に合意しました。

岡田 文科省からは「高校生に“まちづくり”という学科名が馴染むのか。“まちづくり”がひらがなである根拠を示せ」と言われてしまいました。

天野 そんな根拠、無いよね。それで岡田先生に「基礎自治体の部署名で、“まちづくり”という名称がどれくらいあるか調べて」と一言。

岡田 こっちも、言われるままやるのはしゃく。だって基礎自治体は1,800もあるんですよ。それで考えたのが、政令指定都市。調べた結果、当時20市ほどあり、そのうちの8割から9割が“まちづくり”

を部署名として使っていたことがわかった。あれで十分、文科省には通ったんですよ。それで“まちづくり”の対象は基礎自治体レベルという認識に立って、学科の英語名称も Urban Planning や City Planning ではなく Town Planning でしょうねと。そういう背景で学科の英語名称も決まった。

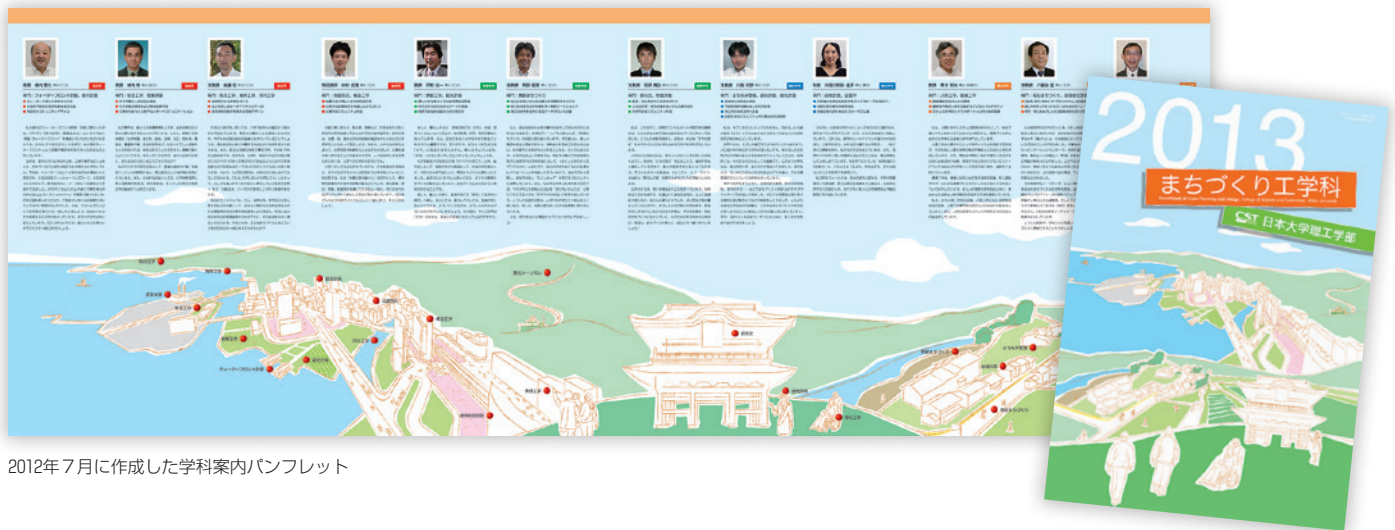
八藤後 どういう都市がターゲットなのか。われわれにとってはコミュニティが対象になり、また公務員になるのでも基礎自治体ということになると、人の顔の見える者同士の付き合いということになる。そのスケールはとなるとやっぱり Town だろうということですね。

横内 そこはすんなり、3人でまとまったね。Urban、City、Town と3つあるけど。

岡田 そう。Urban でもなく、City でもないんですよ。

横内 まあ、悩んだといえば Town か Community。というようなことが、たくさんあったね。

岡田 われわれは理屈を大事にするから。ひとつひとつの根拠をはっきりさせた上での結論なので、だからこそオープンキャンパスでも学科の説明がちゃんと伝えられているんじゃないかなと思います。当時の侃々諤々が、今、功を奏しているような気がします。まずは横内先生から命令があり、私が案をつくって、それを持って天野先生がいろんなところへ交渉に行くという、そんな流れで何年間



2012年7月に作成した学科案内パンフレット

か過ぎました。誰一人欠けてもできなかったと思います。

横内 そうだな、本当に。

天野 それで2012年1月に文科省へ事前説明に行って「2013年度開設にしたい」と。4月にOKの回答が出るはずだったんだけど、この広報として重要な時期にそれが3カ月延びた。もともと新しい学科は“まちづくり学科”と“情報システム工学科”で考えていたんだけど、“情報システム”という学科名はさまざまな事情から日本大学の他学部等から強く調整の依頼があったんです。理工学部内では「これで認可が取れそうですよ」と言っていて、あと2週間後にOKの連絡が文科省から来るという段階だったのですよ。それで“応用情報工学科”になったんだけど、文科省からは「名前が変わるなら書類を出し直しですね」と言われてしまった。

横内 そして“まちづくり学科”も、“工”を入れる」と……。

天野 そうは言われていませんが。文科省で“まちづくり学科”の学士の種類は、学士（工学）ですよ」と聞かれたので「そうです」と言ったら、「まちづくり“工”学科じゃないので、確認です」と担当官が言ったわけ。日大本部としては、これ以上認可を遅らせたくないという思いもあったと思う。「天野先生、“工”を付けてください」と言われました。

横内 即、決めちゃったよな。

天野 だって命令だから。

横内 本当ならOKが出るのは4月だったから、順調に行けば5月から正式に動ける。学生募集ができるはずだった。でも3カ月延びて、8月からようやく広報ができるようになったけど、入試までもう数カ月しか無い。

岡田 もはやオープンキャンパスも終わっちゃっていますからね。結果的に、正式に広報できたのは10月くらいだった。学科のパンフレットは10月に間に合うような形で急ごしらえしたような記憶があります。でも10月には、みんな進路が決まっているわけですよ。だから数字が物語るように、1期生は87名という入学者数になった。

天野 「諸般の事情で広報が10月からになったので、今年は学力を担保するために定員を割ります」と言って、「はじめから定員を割ると宣言するとは!」と学部長に怒られた。結局、何とか付属高校の推薦入試から、そこそこの入学者数を出せたの。

岡田 付属高校には早めに挨拶回りをしていたんです。とにかくまず、面識のあるところから挨拶しに行こうと。理工学部としては35年ぶりの新しい学科だということもあり、付属高校の教職員の皆さんからは「頑張ってください」と本当によく応援してもらえました。

3. 教員の確保とカリキュラム構成

横内 理工学部内の定員の分担はさっき

言ったとおりで、それぞれの学科が何とか定員を減らしたかったのですが、その延長で大学院も再編された。当時医療・福祉工学専攻と不動産科学専攻という2つだけ、学部を持たない大学院があった。当時の滝戸学部長は、これをどうするか、かなり悩んだみたいです。とくに医療・福祉は、医療関係の先生方が定年退職でいなくなってガクンと応募者が減少してきたので、「これはもう、存続は難しいな」と。

岡田 それで、福祉関係の先生方がまちづくり工学科に来たんですね。新学科に向けてカリキュラムを練っているとき、横内先生から突然「福祉関連の科目を考えろ」と言われてびっくりしました。

横内 だけど、結果的には良かったんじゃないの？ カリキュラムに良い柱ができたなと思いましたよ。

岡田 ええ。まず統計的なものが扱えたり、今はバリアフリーや高齢化対策も含め、まちづくりと健康・福祉は一体になってきています。人が中心となる、いわゆる福祉環境工学もカリキュラムに位置付けられたので、時代のニーズに合致しました。だから学部の学科再編や大学院の専攻再編の流れでちょうど福祉分野とマッチングできました。結果的に、今の福祉関係の授業には助けられているところがあると思います。現に、オープンキャンパスに来て「福祉に興味がある」と言う高校生もたくさんいますから。

天野 まちづくり工学科には基本的に、

土木・建築系の4学科、土木・交通・建築・海建から教員を出そうと考えていました。もともと海建だった横内先生と、準備のために交通へ来てもらっていた岡田先生が、海洋建築工学科から来た。岡田先生は、「新しく「まちづくり学科」ができるので、その準備があるからくださいね」と頼んで、来てもらった。「交通に来てもらって、私の横で新学科の設立準備を手伝ってもらいたいので、よろしく」と2010年の秋口には海建まで行って頼んで、2011年度から交通に来てもらいました。

岡田 学科再編の本来の意義は、さまざまな課題を解決することです。そういう意味で言うと、専門科目と一般教育科目との関係をいかにその学科に馴染むようにするか、という話がありました。これは理工学部全体の課題でしたが、まちづくり工学科がユニークだった点は、一般教育科目の中に「まちづくり文学」や「まちづくり法学」や「まちづくり倫理学」という、まちづくりに絡む社会科学系要素を含む科目をつくったことです。それが一般教育の先生方にも非常に好評をいただくことになりました。

横内 確かに、一般教育の先生方には好評だった。例えば、倫理学なんてものは1年生でやるもんじゃない。もっと専門を学んでからと、それで4年生に設置したんだよね。そうしたら「4年生に置くのは面白い」と、すごく言われた。

岡田 まちづくりの視点で講義を組み立ててくれた一般教育の先生がたにも、感謝の思いがあります。ただ残念ながら、理工学部のカリキュラム改定方針で「科目を減らせ」ということになり、いくつ減らさざるを得なくて、そういった付加価値的な科目が今は無くなってしまったことを残念に感じています。

八藤後 先ほど、学科をつくるにあたりゼネコンの方々と接触されたということですが、どんなことを言われましたか？

岡田 まちづくりという新しい学科に対しては、非常に肯定的でしたよね。そうは言っても、即戦力としての現行の国家資格は担保してほしいということ、あと

		1 年次 ●	2 年次 ●	3 年次 ●	4 年次 ●
教養教育科目	選択	共通科目の教養教育科目から 10 単位以上修得すること。			
	外国語科目	英語ⅠA (1) 英語ⅠB (1) 英語ⅡA (1) 英語ⅡB (1)			
保健体育科目	選択	共通科目の外国語科目から、必修以外に英語 2 単位以上を含めて 6 単位以上修得すること。			
	必修	スポーツⅠ (1)			
基礎教育科目	選択	共通科目の保健体育科目から、必修以外に 1 単位以上修得すること。			
	共通	線形代数学Ⅰ (2) 線形代数学Ⅱ (2) 微分積分Ⅰ (2) 微分積分Ⅱ (2) 力と運動の物理学Ⅰ (2) 力と運動の物理学Ⅱ (2)	力と運動の物理学Ⅰ 演習 (1) 力と運動の物理学Ⅱ 演習 (1)		
専門教育科目	必修	まちづくりと職能Ⅰ (2)	統計学 (2)	まちづくり調査・解析 (2)	
	選択	まちづくり法学 (2) まちづくり地理学 (2) まちづくり文学 (2) コンピュータ演習Ⅰ (1)	コンピュータ演習Ⅱ (1) まちづくりと職能Ⅱ (2)		
専門教育科目	必修	まちづくり工学インセンティブ (2) 建築学概論 (2) 社会基盤学概論 (2) 構造力学Ⅰ (2) 測量学 (2) 測量実習 (4)	都市計画Ⅰ (2) 都市計画Ⅱ (2) 建築計画Ⅰ (2) 福祉環境実験 (2) 都市デザイン (2)		
	必修	総合系 まちづくり関連法規Ⅰ (2) 交通総論 (2)	環境学系 景観原論 (2) 観光学系 観光原論 (2) 福祉学系 福祉のまちづくり (2)	総合系 まちづくり事業・制度論 (2) 地域コミュニケーション論 (2)	
専門教育科目	必修	まちづくり工学スタディーズⅠ (1) 建築デザイン演習 (2)	景観デザイン演習 (2) まちづくりワークショップⅠ (2)	まちづくりワークショップⅡ (2) ゼミナール (2)	まちづくり工学総合演習 (1) 卒業研究 (6)
	選択		都市・地域防災論 (2) 都市環境学概論 (2) 社会基盤デザイン (2) 市街地整備論 (2) 建築計画Ⅱ (2) 構造力学Ⅱ (2)	国土・地域計画 (2) ウォーターフロント計画 (2) 地盤力学 (2) 水理学 (2) 都市環境計画Ⅰ (2) 建築生産 (2)	都市環境計画Ⅱ (2)
専門教育科目	選択		総合系 まちづくり関連法規Ⅱ (2) グリーンランドスケープⅠ (2) 景観生態学 (2) 観光学系 リゾート整備計画 (2) 福祉学系 ユニバーサルデザイン (2) 地域健康づくり論 (2)	総合系 プランナーのための会計学 (2) 防災関連法規 (2) 不動産概論 (2) 都市経営学 (2) 建設マネジメント (2) まちづくり安全工学 (2) 健康関連対策とまちづくり (2) 環境学系 景観まちづくり論 (2) グリーンランドスケープⅡ (2) 観光学系 歴史・文化とまちづくり (2) 観光まちづくり論 (2) 福祉学系 住宅・都市のユニバーサルデザイン (2) 住宅・都市のユニバーサルデザイン演習 (2)	総合系 まちづくり倫理学 (2) まちづくり工学総合講座 (2)
	選択	(まちづくり特殊講義Ⅰ (2)) (まちづくり特殊講義Ⅱ (2))		インターンシップ (1) 都市・地域デザイン演習 (2)	

※まちづくり特殊講義Ⅰ及びまちづくり特殊講義Ⅱは、産業界などから要望があった場合に開講される

()内の数字は単位数

2013年度のまちづくり工学科カリキュラム

はコミュニケーション能力の重要性。それが鮮明に残っています。

横内 話を聞いたのは、そこまでベテランの社員ではなく、現場の最前線に立っている人。そうすると当然、設計しているだけとか、土地を買っているだけとかではなく、「その土地をどう有効に使うのか？」という要望が、クライアントから来る。10年くらい前から、もうそういう時代に入っていたんですよ。ですからまちづくり工学科に対しては、肯定的な意見が極めて多かったですね。

天野 私も基礎自治体の方とはよく付き合っていますが、「建築も土木も両方とも知っていて、計画もできて、住民とも

ちゃんと話ができて、みんなで住んだら楽しいまちをつくりたいと思っている人はいない？」と聞かれる。役所の人、とくに基礎自治体の人たちはみんな言いますね。

横内 結局、基礎自治体が土台をつくっていくという意識が非常に高いので、彼らは建築や土木で何かするというよりも、どんなに楽しい場所をつくるか、市民に喜んでもらえるか、というのをいつも考えている。だから、まちづくり工学科ができるというのは、彼らにしてみたら非常にウエルカムな話だったんじゃないかな。

岡田 高校生のうちから自分の将来が土

		● 船橋キャンパス ■ 駿河台キャンパス			
		1 年次 ●	2 年次 ■	3 年次 ■	4 年次 ■
教育科目	必修	自主創造の基礎			
	多文化と社会の理解 (1 群)	倫理学 (2) 歴史学 (2) 文学 (2) 法学 (2)	社会学 (2) 経済学 (2) 日本国憲法 (2) ドイツ語 I (1)	ドイツ語 II (1) フランス語 I (1) フランス語 II (1) 中国語 I (1)	中国語 II (1) ことばと文化 (2)
	心と身体 の表現 (II 群)	必修 スポーツ I (1)	スポーツ III (1)		
	科学・技術の リテラシー (III 群)	哲学 (2) 日本語表現の基礎 (1) クリティカル・シンキング (1) 感性芸術学 (2) 心理学 (2) スポーツ I (1) 健康の科学 (1)			
	総合・ゼミナール (IV 群)	技術者倫理 (2) 科学技術と人間 (2) 科学技術と経済 (2)	知的財産権論 (2) 科学技術史 (2) 現代物理学 (2)	地球環境化学 (2) 自然環境論 (2) 地理学 (2)	
基礎教育科目	グローバル スキル分野	英語 I A (1) 英語 I B (1) 英語 II A (1) 英語 II B (1)			
	選択	4 科目のうち 2 科目を修得	英語 III A (1) 英語 III B (1) English Communication I (1) English Communication II (1)	英語特講義 A (1) 英語特講義 B (1)	2 科目のうち 1 科目を修得
	数学系	微分積分学 I (2) 微分積分学 II (2) 線形代数学 I (2) 線形代数学 II (2) 数学演習 I (1) 数学演習 II (1)	関数論 I (2) 関数論 II (2) 微分方程式 I (2) 微分方程式 II (2) 数理統計学 I (2) 数理統計学 II (2)		
	物理学系	熱とエントロピーの物理学 (2) 電気と磁気の物理学 (2) 物理学 I (2)	物理学 II (2) 力と運動の物理学 I (2) 力と運動の物理学 II (2)	物理学 I 演習 (1) 物理学 II 演習 (1) 力と運動の物理学 I 演習 (1)	力と運動の物理学 II 演習 (1) 基礎物理学実験 (2)
	化学系	基礎化学実験 (2) 物質の構造と状態 (2) 物質の変化と性質 (2) 材料化学 (2)			
専門教育科目	必修	まちづくり工学インセンティブ (2) まちづくりと職能 (2) まちづくり工学概論 (2) デザイン基礎 (1) 建築デザイン演習 (2) 測量実習 I (2) 測量実習 II (2)	まちづくりワークショップ I (2) 福祉環境実験 (2) 景観デザイン演習 (2)	まちづくり工学総合演習 (1) ゼミナール (2) まちづくり工学キャリアデザイン (1)	卒業研究 (6)
	選択必修	基礎力学 I (2) 基礎力学 II (2)	建築計画 I (2) 都市計画 I (2) まちづくり関連法規 (2) 都市デザイン (2) 景観原論 (2) 福祉のまちづくり (2) 都市・地域防災論 (2) 構造力学 I (2) 構造力学 II (2)	まちづくりワークショップ II (2) 観光原論 (2)	
	選択	コンピュータ演習 (1) 測量学 (2) まちづくり人間科学演習 (1)	建築構法 I (2) 建築構法 II (2) 建築計画 II (2) 宅地建物学 (2) 建設材料学 (2) 都市環境学概論 (2) 社会基礎デザイン (2) 交通総論 (2) 景観まちづくり論 (2) ユニバーサルデザイン (2) グリーンランドスケープ (2) 工業職業指導 I (2)* 工業職業指導 II (2)* 工業総論 (2)*	まちづくり事業・制度論 (2) 都市計画 II (2) 国土・地域計画 (2) 都市・地域デザイン演習 (2) 都市環境計画 (2) ウォーターフロント計画 (2) 住宅・都市のユニバーサルデザイン (2) 住宅・都市のユニバーサルデザイン演習 (2) 観光まちづくり論 (2) 地域健康づくり論 (2) 歴史・文化とまちづくり (2) 地盤力学 (2) 水理学 (2) 流域管理工学 (2) 上下水道工学 (2) 空間情報処理 (2) 建築物の設備 (2) 建築生産 (2) まちづくり技術の実践 (2) 建設マネジメント (2) インターンシップ (2)	

*工業職業指導 I 及び工業職業指導 II、工業総論の 3 科目は、就職課程を履修している者が履修する

() 内の数字は単位数

2022年度のまちづくり工学科カリキュラム

木なのか建築なのか、進路をはっきりとは決められない状況にあっても、まちづくり工学科に入学してから分野横断的な学問を経験して、自分の適性が判断できるというのは大きな強みになったんじゃないでしょうか。まだ国家資格に“まちづくり士”というのは無いし、公務員採用分野にもまだ“まちづくり職”というのは無いので、土木職か建築職かどちらかになっちゃうんだけど。どちらも勉強できて、大学に入ってから自分の適性を見極めて進路を決められるという意味では、オープンキャンパスでも反応は良いですよ。

4. 資格取得とカリキュラムの変遷

横内 でも企業のことを考えちゃえば、まだ過渡期ですよ。

天野 役所も土木職と建築職だけで、まちづくり職を採ってない。

横内 だからそれが問題でしょう。

八藤後 だけど学生たちはよく、民間でも公務員でも、建築職や土木職に軸足を置いてそれぞれの分野によく食い込んでくれています。最近こそ言われなくなりましたが、「たくさん学べるけれども、どっちも中途半端なんでしょう」と、当初は言われましたね。そういうことを、

今では本当に言われなくなりました。当初は、建築士の受験資格が二級だったんですよ。学科開設後、横内先生が卒業生や関係者からお話をお聞きになって「このままではマズイかな」となり、一級建築士受験資格に対応したカリキュラムに変更し、1 期生から適用できました。

横内 最初は二級建築士でも良いかなと思っていました。ただ、学科を開設してすぐだったと思いますけれども、とくにスーパーゼネコンの人たちを何人か集めて、カリキュラムの説明をしたんです。

良い反応だったんですが、「ところで一級建築士は受けられますよね」と聞かれたわけ。「それはちょっと……」と言ったら、「それなら技術屋としては採用できない」と、はっきり言われました。なぜかと言うと、建築系で採用された人の社員教育は一級建築士に受かることを念頭に置いて行いますから、ついてこれない。「このままだとどうなりますか？」と聞いたら、「たぶん入社試験を受けられないと思います」と言われました。

八藤後 厳しいですね。門前払いということですね。

横内 数社からそう言われましたが、たぶんどこも同じでしょうね。そう言われて、たいへん困った。就職の枠として、その一部のゼネコンでもダメになったら、すごく就職範囲が狭まりますよね。

八藤後 ということで一級建築士受験資格取得に向けて、はじめは建築学科から 4 科目ぐらいお借りして受講させていただくことになりましたね。今思えばよく協力していただきました。

横内 そういう意味では、読みが非常に甘かった。大反省しています。

八藤後 逆に言うと、それぐらい混んとしていましたし、そういうことを事前にすべて把握するというのはなかなか難しいということです。あまり大きな声では言えないのですが、走りながら考えたところはありましたね。でも 1 期生が卒業するころには、ほぼ今の形ができていたというふうに思っていますね。

横内 はい。

八藤後 それから当初は JABEE を受審

する予定で準備をしていたんですね。カリキュラム認定を通るのが、なかなか難しいんじゃないかという判断はありましたか？

天野 難しいというより、とても面倒。作業量を置いておけば、カリキュラム認定は十分通ります。ただそのための資料づくりがとんでもなく大変だった。今はだいぶ減ったんですけどね。

岡田 教員の数がギリギリだったでしょう。

八藤後 当時はそれぞれ出身母体の学科の授業を持っていたんですね。

一同 そうそう。

八藤後 横内先生なんて、科目数を調べたら20を超えていた。

天野 認定は、カリキュラムの質ではなく、労力的に無理だったということ。

八藤後 ただ、JABEE 認定を見据えて「技術士補が取れる」と最初に謳ったということもありまして、この回収に向かわなければいけなかった。これが恐らく、1期生が入って1年目かな。

岡田 それで放課後の技術士講座が誕生した。しかも年々合格者が出て来て。

八藤後 いろんな資格を取った人たちをお祝いすることも、当初はやっていましたね。「頑張って在学中に資格を取ると、顕彰してもらえるんだ」となれば、やっぱり学生たちを奮い立たせ、多少なりと

も資格取得の良い動機付けになっていたのではないかと思います。

天野 私は横で見えていて、カリキュラム改編はしょうがないものの、土木系や建築系の資格取得を睨み過ぎていて、一般教育との連携科目やまち科にとって必要な科目についても、資格と絡まないと割と簡単に切り捨てたという側面があるので、そこは少し反省をしたほうが良いかなと思いますね。もちろん資格にとってマストな科目はいくつかあると思うけど、資格に絡まない科目を十分な議論をしたかどうか微妙なところで無くしてしまったような気がしているので。このまま行くと、まち科独自ではなく、土木+建築になっちゃうぞというのは気を付けなくてはいけない。このベクトルで、資格取得に関連していない科目は贅肉だとして切り落としていくと、学科の存在意義にまでかわりかねないと思います。まち科の学生は「土木も建築も勉強している、まちづくりに興味のある学生」だということをもっと強く伝えたいなと思っています。「まちづくりをするなら、土木工学科や建築学科でもいいや」と思われるのはマズイ。最初のころ、何かの演習科目で「2グループに分けて、土木系の演習と建築系の演習に分けていいですか？」と聞かれて「それはやめて。土木系の演習を受けた学生と建築系の演習を受けた学生とで、学科を2色に分けないで」と強く言った覚えがあります。土木も建築も学べ、そこにプラスして福祉とか観光とかも学べる“まちづくり”という括りがあるんだということを、どう忘れないようにするか。学科をつくるときに最初に議論したことをあらためて伝えていかないとマズイ。資格で言えば、どうしても既存の分野に縛られた資格しか無い。公務員試験も土木職と建築職しか無い。まちづくり系の資格や就職区分が無いがゆえに、自分が土木系とか建築系とかだと勝手に勘違いされちゃうと、うちの学科の存在意義が無くなる。根底が崩れちゃう。そこを忘れないようにすることが今後とても大事だろうと、かねがね思っているんです。

横内 片や大学からは「授業科目を削減せよ」という話もあります。じゃあ資格を取れなくなったら、学生が集まるのか。学科ならではの個性と将来を左右する資格との両立の難しさだね。

八藤後 私は、先生がたがその辺は非常にうまくやってくれていて、一見土木、一見建築のような名称の科目であっても、その中に“まちづくり”の話題をかなり入れてお話ししていただいているように見えます。現在のところは過渡期だから、まず入り口で“まちづくり”の専門職として就職する人は少ないかもしれないですけども。土木もしくは建築、どちらか片足をしっかり置いた上で“まちづくり”をやるというのが今の状況。どっちかを、まずは選ばなきゃならないという現実もありますね。

岡田 国家資格の対象科目だけ見るといろいろな懸念もあるけど、まち科には景観・観光、環境・防災、健康・福祉という系列があって、かなりの特色が出ているんですね。だから、そこでのバランスになってくんじゃないかと思うんです。はじめにカリキュラムをつくるときに、理工学部から「土木・建築と差別化しなさい」と要請されたことから、もともと根幹にあった分野横断的な“景観”が非常に大きな存在となり、それをまず軸にして関連する学際分野を拾っていったら“観光”が出てきたんです。だから結果的に、カリキュラムの特徴としては、1、2年生の低学年の中で、企業ニーズにかなう土木と建築の国家資格のベースは押さえて、3、4年生になるにつれて、景観、観光、福祉というような学際的なものを修得する。ということは、建設系の学問分野を幅広く押さえた卒業生像というものがあるわけです。ここ数年、まち科は就職内定率100%になっていますけど、そうしたカリキュラムの効果も見え始めているのかなという気はします。

5. まちづくり工学科の展望

岡田 学科として初めて参加した付属高



天野 光一 特任教授 | あまの・こういち

1980年 建設省土木研究所
1987年 東京工業大学 助手
1992年 日本大学理工学部 交通土木工学科専任講師
1995年 同 交通土木工学科助教授
1996年 東京大学大学院 助教授
2001年 日本大学理工学部 社会交通工学科教授
2013年 同 まちづくり工学科教授
2022年 同 まちづくり工学科特任教授



合格者説明会を兼ねた「まち歩き」イベント

校生のためのオープンカレッジと駿河台入試フォーラムは、従来の12学科想定で教室の配置が決まっていたから、われわれは教室に収まらなかったんですよ。それで、駿河台1号館のギャラリーという、一見不利な場所でやることになった。ただわれわれはそういう空間利用は得意だったから、与えられた空間をどう有効活用するかを考えた。それが高校生受けは良かったんだよね。アイキャッチを工夫して、なるべくギャラリーのほうに誘導するように。それと、まちづくり工学科はストーリー性を重視する学科として、ちゃんと教員がひとりひとり対話でおもてなしして、入学後のミスマッチが無いように、学科の特色を丁寧に説明しよう。それが今も売りになっています。最近では、オープンキャンパスのサポート学生たちもしっかりと学科説明ができるようになってきたので、とても頼もしく感じています。

八藤後 他学科の先生がたからもよく言われますよね。「まち科は教員や学生がすごく真摯に対応していますね」と。

岡田 学科開設が決まる前、それでもオフィシャルに活動ができるように“設立準備委員会”という組織をつくったんですよ。まだ実態が無い、学生もいないから“まちづくり工学科”とは言えない。でも、その設立準備委員会という名称で、正式な活動をさせてもらった。名刺に“設立準備委員会”と書いて、いろいろなところへ挨拶回りに行ったんです。とにかく認知してもらおうと。2013年開設だったから、配布する印刷物などにはそう書こうとしたんだけど、まだ本当に2013年4月から開設できるかわからなかったから、「言い切るんじゃない」と理工学部執行部に怒られて、開設“予定”と加え

たんですよ。

横内 そうだ、入れた入れた。

岡田 急遽ですよ。「岡田よ、やっぱり入れなきゃダメだよ」と。「えー、またやり直しますか?」とか言いながら。ちなみに、この苦労を胸に刻んでおこうと、その「平成25年4月開設予定」と印字されたクリアファイルを大切に保管しています(笑)

八藤後 学科開設当初から、広報には非常に熱心に取り組んできましたが、合格者に対しての説明会もしていますよね。

岡田 合格者説明会は、いわゆる歩留まり対策です。1期生こそ定員割れが生まれましたが、2期生から少しずつ定員が充足して、偏差値も徐々に上がっていきました。そうすると、日大以外の上位校がライバルになっちゃうんですよ。だから合格者には、いかに当学科にとどまってもらえるかなんですよ。

八藤後 偏差値が上がるということは、上がったなりにまた苦労があるわけですね。

岡田 そういうことです。いわゆるブランド大学に引張られちゃう。そうなれば、やっぱりまち科の魅力を徹頭徹尾説明しなきゃならない。だから保護者も含めて、きちんと説明しよう。理工学部には入試方式がたくさんあって、その都度合格者を集めないとダメなんです。それで毎年2回から3回、合格者説明会を行っています。休日開催にしたり、平日であれば会社帰りのお父さんが来てもらえる時間に設定してみたりして、今も続けている状況です。

天野 合格者説明会に来てくれた人は、かなりの確率で入学している。

岡田 やっぱり興味があるから来てくれるので、大変だけどやりがいがあります。協力いただいている若手教員にも非常に感謝しています。

横内 直接、顔を合わせることだね。

岡田 そうですね。

天野 これまでを振り返って、力及ばなかったと思うのが、地方自治体で土木職や建築職ではなく“まちづくり職”という公務員の職種をつくれなかったこと。

岡田 まさにわれわれの期待と展望はそこですよ。あとはできれば“まちづくりプランナー”のような国家資格ができると、まちづくり工学科やまちづくり分野にとって素晴らしい社会状況になってくるんじゃないかと思います。その辺が、われわれの今後の展望になってくると思うんですよ。まちづくり工学科は、当時の大学内の状況と社会一般の動向とのせめぎ合いの中で、われわれの落としどころを侃々諤々やってきながら誕生した学科です。今日、このタイミングでの座談会の内容は、記録として残しておかないと、学科の将来にも響くと思います。われわれもいつまでもいるわけではないから、今日の話は後世に語り継いでいかなければならない貴重な原石になると思うんですよ。

八藤後 学科創設50周年とか100周年のときに、ぜひ掘り起こしてもらいたいですね。概ねお話は伺ったと思いますので、これで締めてよろしいでしょうか。

岡田 かなりツボは押さえたと思います。激動の時代を駆け巡るまちづくり工学科の設立準備。もう一回新しい学科をつくれと言われたら、私は絶対参加しませんよ。

一同 (笑)

八藤後 皆さん、今日は貴重なお話をありがとうございました。



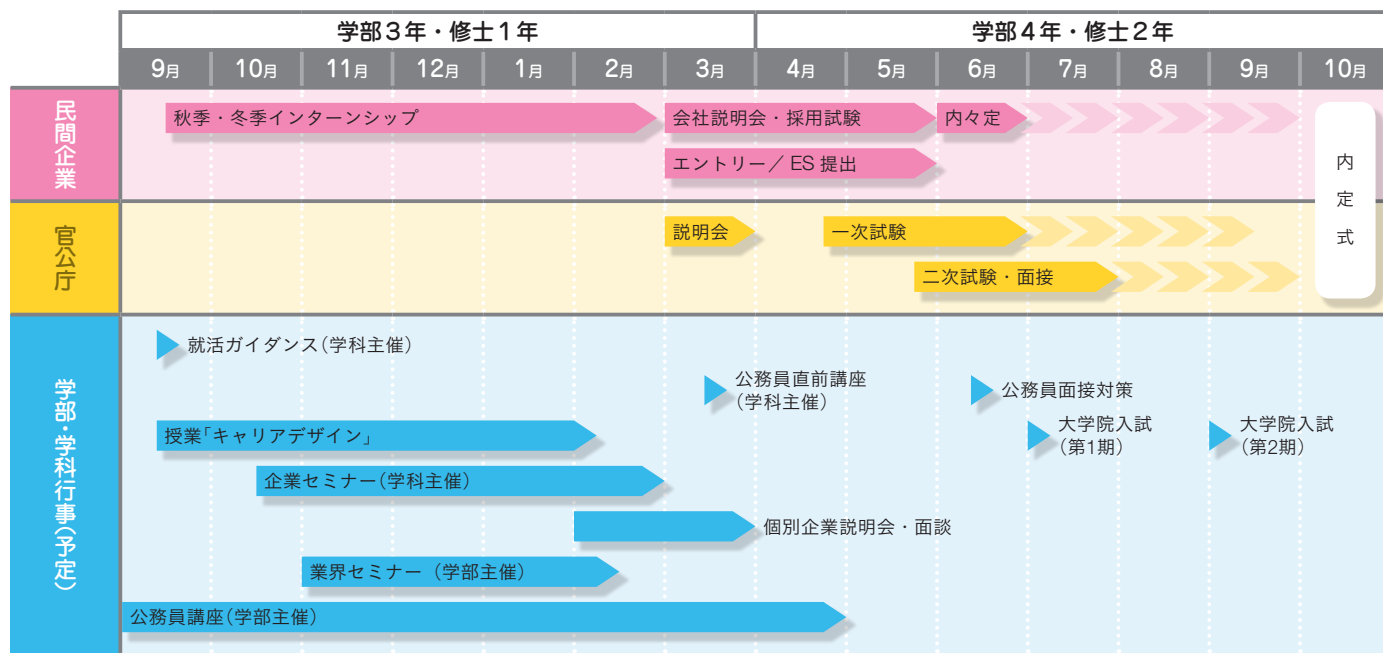
八藤後 猛 特任教授 | やとご・たけし

1981年 国立職業リハビリテーションセンター研究部
1991年 現・独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター
1996年 日本大学理工学部 建築学科助手
2005年 同 建築学科専任講師
2010年 同 建築学科准教授
2013年 同 まちづくり工学科教授
2022年 同 まちづくり工学科特任教授

まちづくり工学科10年のあゆみ

★ 教室主任

2012年 平成24	6月 まちづくり工学科として初の「付属高校生のためのオープンカレッジ」参加 ➡ 1 7月 まちづくり工学科として初の公式高校訪問開始 7月 まちづくり工学科として初の「駿河台入試フォーラム」参加 ➡ 2 8月 まちづくり工学科として初の「オープンキャンパス」参加 ➡ 3 10月 1期生AO入試	  	2015年 平成27	6月 まちづくり工学科独自の「父母懇談会」初の開催 ➡ 12 8月 「第1回海外研修旅行」開催 2016年 平成28 5月 1期生「卒業アルバム委員会」発足 10月 「まちづくり工学科卒業生の会」の名称が「桜まち会」に決定 10月 1期生（3年生）対象「学科就職ガイダンス」開催 ➡ 13 12月 学生用就職メーリングリスト運用開始 12月 「宅建士・技術士第一次試験合格者祝賀会」初の実施 ➡ 14	  
2013年 平成25	4月 ★ 横内憲久 4月 まちづくり工学科 1期生入学 ➡ 4 6月 学科広報誌『まち』創刊 6月 まちづくり工学科開設記念シンポジウム「新たな“まちづくり”を考える」開催 ➡ 5 8月 1期生「まち歩き—東海道品川宿を歩く—」実施 ➡ 6 10月 「第10回お茶の水アートピクニック」に参加（以降、毎年参加） ➡ 7	   	2017年 平成29	3月 まちづくり工学科「第1回学位記伝達式・謝恩会」開催 ➡ 15 4月 大学院理工学研究科まちづくり工学専攻博士前期課程 1期生入学 2018年 平成30 2月 「第2回海外研修旅行」開催 ➡ 16 9月 駿河台校舎タワー・スコラ竣工、まちづくり工学科の全面移転 10月 ★ 岡田智秀 10月 「第1回理工学部校友会まちづくり部会総会・懇親会」開催 ➡ 17 12月 「企業セミナー」開催（以降、毎年開催）	  
2014年 平成26	2月 1期生との学科懇親会初の開催 ➡ 8 5月 1期生（2年生）対象「オリエンテーション」初の実施 ➡ 9 10月 ★ 八藤後 猛 12月 「宅建試験・環境社会検定合格者祝賀会」初の実施 ➡ 10	  	2019年 令和元	3月 大学院理工学研究科まちづくり工学専攻博士前期課程 1期生修了 4月 大学院理工学研究科まちづくり工学専攻博士後期課程 1期生入学 7月 「桜まち会特別講演会」初の開催 ➡ 18 8月 「第3回海外研修旅行」開催 10月 「第2回理工学部校友会まちづくり部会総会・懇親会」開催 2020年 令和 2 4月 新型コロナウイルスまん延により、リモート授業始開始（2022年度までに段階的に縮小） 9月 「就職活動支援ポータルサイト」開設 2021年 令和 3 11月 卒業生による在学生向け「オンライン講演会」開催 2022年 令和 4 3月 大学院理工学研究科まちづくり工学専攻博士後期課程 1期生修了 10月 ★ 後藤 浩 2023年 令和 5 3月 まちづくり工学科第7回（7期生）学位記伝達式開催 4月 新型コロナ第5類移行により、対面授業へ全面的に復帰	
2015年 平成27	5月 まちづくり工学科就職支援・キャリア教育プログラム「企業懇談会」初の実施 ➡ 11				



キャリア支援・就職活動の概略スケジュール

就職活動はみなさんの今後を左右する大切な機会です。これを機に、真剣に将来を考え、悩み、自分の道を切り拓いてください。

1. まずはスケジュールを確認しよう

みなさんが対象である2025年(2024年度)卒・修了の就活スケジュールについては、本年度までのスケジュールを踏襲する方針が政府より示されています。しかし、実際には多くの企業がこれよりも早い日程で実質的な選考を進めることが想定されます。

公務員試験については国家公務員採用情報 NAVI (<http://www.jinji.go.jp/saiyo/saiyo.htm>) や公務員試験情報こむいん (<http://comin.tank.jp/>)、各自治体のホームページ等を頻繁に確認して情報入手しましょう。

本学大学院入試は、例年7月初旬(推薦・一般第1期)、9月上旬(一般第2期)、3月(一般第3期)に行われます。研究活動を通じて人間力を高め、自分の可能性を広げるためにも大学院進学を検討しましょう。

2. 始動しよう

まちづくり工学科ではこれまで、さまざまなキャリア支援プログラムを展開してきました。その集大成として、後期月曜5時限目に必修科目「まちづくり工学キャリアデザイン」を開講します。今後のキャリアを形成していくための具体的な情報をみなさんに提供し、具体的な進路を考え、対策を進めてもらいます。しっかり取り組んでいきましょう。

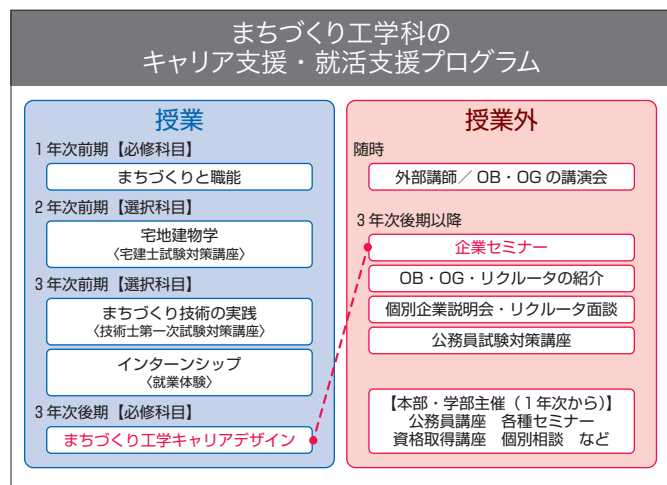
3. 情報収集しよう！

・まちづくり工学科から発信する情報を活用しよう！

まちづくり工学科独自の就職活動支援サイトは、夏季インターンシップでも活用してもらいました。今後も各種情報(秋季/冬季インターンシップ・セミナー・説明会などのイベント情報、OB・OG・リクルータ提供情報、求人情報(学校推薦・自由応募))の入手や、まちづくり工学科の先輩たちが残してくれた貴重な就職体験記・公務員試験合格体験記が閲覧できます。また、就職全般/公務員メーリングリストでもさまざまな情報を発信していきます。メーリングリストへの登録方法は授業「まちづくり工学キャリアデザイン」で説明します。

・まち科や大学主催の行事を活用しよう！

まちづくり工学科では「就職活動ガイダンス」「企業セミ



ナー」「OB／OG・リクルータによる説明会・面談」「公務員1次試験・面接対策講座」を開催予定です。実際に働いている方々の話を直接聞いたり、質問をできる貴重な機会です。パンフレットやインターネットのみでは入手できない、みなさんが本当に必要とする情報を得るチャンスです。また、本部や学部が主催する「公務員講座」「業界セミナー」なども多数開催予定です。大学で開催する行事では、参加企業・団体等がみなさんを過度に勧誘することは決してありません。安心して積極的に参加しましょう。詳細は、まち科就

活支援サイトで案内します。

4. 授業について

就活に気をとられ過ぎて授業をサボってばかりでは本末転倒です。大学は就職予備校ではありません。みなさんが最優先すべきことは大学での勉強であることを決して忘れずに。

われわれ教員はできる限りみなさんをサポートしていきます。相談などあれば遠慮なくどうぞ。

まちづくり工学科就職活動支援サイト

日本大学メールアドレスでログイン後に、以下のURL もしくはQRコードでまち科就活サイトへアクセスしよう！

まちづくり工学科の教員及び学生のみ
閲覧可能



<https://sites.google.com/nihon-u.ac.jp/machicarrier/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>



令和5年度前期 “まち” 行事・イベントカレンダー

3/25(土)

卒業式（学位伝達式）
（駿河台キャンパス 1号館143教室 午前11時開始）



岡田・落合研究室



小木曽研究室



田中研究室



仲村研究室



西山・天野研究室



押田研究室

4/3月 - 7金 前期ガイダンス

〈教室主任〉 後藤 浩

〈担任〉 1年生 田中 賢、西山 孝樹、田島 洋輔
2年生 仲村 成貴、牟田 聡子
3年生 依田 光正、山崎 晋
4年生 岡田 智秀、押田 佳子、落合 正行
大学院 阿部 貴弘

〈就職〉 仲村 成貴、後藤 浩、田中 賢、八藤後 猛

〈広報〉 岡田 智秀、田島 洋輔



4/7金 新入生歓迎式（船橋キャンパス 理工スポーツホール）

4/8土 入学式（日本武道館）

4/10土 前期授業開始



測量実習の授業風景

6/10土 『まちづくりワークショップⅡ』（3年次前期）

まちづくりワークショップⅡ（千葉県富里市×日本大学理工学部包括連携プロジェクト）では、千葉県富里市日吉台地区を対象として、地域に潜在する課題や魅力を発掘するため、地域住民や市職員とのまち歩きや地域課題や魅力の発掘ワークショップを実施しました。



6/18日 付属高校生のためのオープンカレッジ（駿河台キャンパス タワー・スコラ S402・S403教室）

まち科ブース来場者数：250名

理工学部総来場者数：677名

（うちオンラインでの参加33名）



6/25日 オープンキャンパス駿河台（駿河台キャンパス タワー・スコラ S402・S403教室）

まち科ブース来場者数：581名

理工学部総来場者数：2,082名

（うちオンラインでの参加85名）



7/8(土) 後援会父母面談会(駿河台キャンパス タワー・スコラ S401・S402・S406教室)

7/15(土) 令和5年度第1回修士論文審査会(駿河台キャンパス タワー・スコラ S204教室)

氏名	発表タイトル
(博士前期課程 2年生)	
梅澤 駿	わが国の臨港地区における分区の運用実態に関する研究 ―国際戦略港湾と国際拠点港湾の23港に立地する一般開放施設を通して―
佐々木 舞緒	市町村が管理する道路橋の維持管理計画策定に資する指標の検討 ―地震時の避難経路を考慮して―
藤山 遼太	日常利用と防災機能を両立させる津波避難施設「命山」の整備要件に関する研究 ―静岡県に現存する「命山」に着目して―
中尾 太一	米国ワシントン州における日系人に関わる歴史的環境保全に関する研究 ―歴史的価値の評価手法に着目して―
西山 晃太	百貨店撤退後における建物・跡地の利活用に関する研究 ―空間実態・利活用方針に着目して―
野中 優希	空家等対策の推進に関する特別措置法による代執行対象地の立地特性及び跡地利活用に関する研究
柳沼 雄波	プラフ積擁壁の歴史・文化的価値に関する研究
山地 康介	登録観光地域づくり法人の連携実態に関する研究
須藤 嵩晃	複合書店の形成過程に関する研究 ―東京都23区の複合書店を事例として―
(博士後期課程)	
桑波田 謙	平滑な路面環境下における視覚障害者誘導システム構築
秋元 美咲	歩行補助つえ使用に適した歩行者系舗装材の評価に関する研究

7/29(土) 『まちづくりワークショップⅡ』 成果発表会

富里市×日本大学理工学部包括連携プロジェクトの一環として、本科目内では富里市でワークショップを実施している

富里市・日本大学理工学部 包括連携協定プロジェクト
大学生が提案する富里市目吉台の未来の姿

日本大学理工学部まちづくりワークショップ委員会では、富里市との包括連携協定プロジェクトの一環として、学習発表「まちづくりワークショップⅡ」内にて、富里市目吉台地区に関する公開説明会、説明会後編説明会(まちづくり)、富里市役所や目吉台地区住民の代表者の方々の説明会を通じて、富里市目吉台地区の未来の姿についての提案内容やデザイン・計画などを発表し、富里市目吉台地区の未来の姿について関係者の方々と意見交換を行いました。

2023.7.29 sat
―ひよし夏祭りの実施状況―

2023年7月29日(土)に開催されました「第3回ひよし夏祭り」の開催状況について、その成果や今後の取り組みについて、富里市目吉台地区の方々へご説明いたしました。日本大学には、120名もの方が参加し、学生自身の提案内容や、富里市目吉台地区の未来の姿について関係者の方々と意見交換を行いました。



す。2023年7月29日(土)には、対象地域の「ひよし夏祭り」に参加しました。お祭り全体では3,000人ほどの参加者があり、日大ブースには五十嵐市長を含む120名ほどの来場者を迎えました。

8/6(日) - 7(月) オープンキャンパス船橋

まち科ブース来場者数：1日目1,066名、2日目 723名
理工学部総来場者数：1日目4,167名、2日目2,552名



8/26(土) 後援会地方父母面談会

福岡会場(仲村成貴) 1組

9/30(土) 9月卒業学位伝達式

まちづくり工学科卒業生：4名

後援会役員(父母役員) ※敬称略

1年 澁川 剛史 2年 松永 勝也 4年 尾崎 彰吾 大学院 三浦 邦明

学会・協会等の受賞、テレビ放映や新聞・雑誌に掲載された記事、書籍の出版など、本学科の教職員・学生の活躍を紹介します。

[受賞]

■ 教授 阿部貴弘

令和4年度土木学会賞 研究業績賞

対象：近世都市における都市設計論理
と水辺空間の変遷に関する研究

受賞年月日：2023年6月9日

■ 4年 落合はる菜・松島萌華

(指導教員 落合正行)

団地再生支援協会第20回集合住宅再生・団地再生・地域再生学生賞 奨励賞

対象：解体新所～郊外に取り残された学生アパートを新たな居場所へ～

受賞年月日：2023年6月19日



■ 博士前期課程1年 三浦靖貴

(指導教員 岡田智秀、田島洋輔)

日本地域政策学会第22回全国研究「東京」大会 審査員特別賞（ポスターセッション個人部門）

受賞年月日：2023年7月9日



[講演等]

■ 教授 阿部貴弘

令和5年度研修 土木景観（「景観まちづくり」教科目）

主催：全国建設研修センター

開催年月日：2023年7月20日

■ 教授 岡田智秀

水郷こしがやの魅力と水辺空間の活用（「水郷こしがやの魅力を考えるシンポジウム」基調講演）

主催：NPO 法人越谷市住まい・まちづくり協議会

開催年月日：2023年3月18日

御前崎市の景観計画と観光戦略について（「御前崎市景観計画策定に伴う色彩勉強会」講演）

主催：御前崎市

開催年月日：2023年4月28日

景観計画における「景観重点地区」の意義と効果（「御前崎市景観計画における重点地区ワークショップ」講演）

主催：御前崎市

開催年月日：2023年5月31日

地方都市における持続可能なウォーターフロントのまちづくり（「みなとまちづくり講演会」基調講演）

主催：ウォーターフロント協会

開催年月日：2023年6月9日

景観まちづくり塾のあゆみと展望（「あらかわ景観まちづくり塾・ワークショップ」講師）

主催：荒川区

開催年月日：2023年7月22日

ウォーカブル空間形成に資する空間資源の捉え方（「五井駅周辺部ウォーカブル空間形成ワークショップ①」講師）

主催：市原市

開催年月日：2023年8月8日

ウォーカブル空間形成の社会実験の留意点（「五井駅周辺部ウォーカブル空間形成ワークショップ②」講師）

主催：市原市

開催年月日：2023年8月25日

ウォーターフロントのまちづくり一歩みと展望―（「フォーラム Logistics Architecture」講師）

主催：Logistics Architecture 研究会

開催年月日：2023年9月5日

南摩の景観まちづくり～学ぶ・考える（第1回）～（鹿沼市立南摩中学校「総合的な学習の時間（地域景観学習）」講師）

主催：鹿沼市

開催年月日：2023年9月7日

地域資源の捉え方とウォーカブル空間形成の留意点（「北戸田駅周辺部ウォーカブル空間形成ワークショップ」講師）

主催：戸田市

開催年月日：2023年9月16日

■ 教授 仲村成貴

気候変動問題など現代の諸問題を踏まえた今後の技術研究発表会のあり方（「土木学会関東支部第50回技術研究発表会記念パネルディスカッション」パネラー）

主催：土木学会関東支部

開催年月日：2023年3月8日

市境界周辺に居住する住民の避難行動シミュレーション（「日本大学災害研究ソサイエティ（NUDS）シンポジウム」講演）

主催：日本大学災害研究ソサイエティ

開催年月日：2023年3月22日

出張講義「地震災害を軽減する」（講師）

主催：昭和鉄道高等学校

開催年月日：2023年6月15日

■ 准教授 山崎 晋

「パリテ」で考える、これからのワークライフバランス（「2023年度日本建築学会大会パネルディスカッション」主題解説および討論）

主催：日本建築学会男女共同参画推進委員会

開催年月日：2023年9月12日

■ 助教 落合正行

倉庫リノベーションによるみなとまちづくり

主催：神奈川大学建築学部建築学科曾我部・吉岡研究室

開催年月日：2023年6月27日

■ 助教 田島洋輔

埼玉県久喜市・大学生と考える高校生環境ワークショップ～久喜の桜で広がるひと・環境・文化～（講師）

主催：久喜市環境課

開催年月日：2023年6月10日（第1回）、7月22日（第2回）、9月2日（第3回）

[依頼原稿]

■ 教授 阿部貴弘

土木広報への向き合い方

掲載誌：『月刊建設』Vol.67, No.7, pp.4-5
（全日本建設技術協会）

発行年月日：2023年7月

■ 教授 岡田智秀

特別寄稿「みなとの既存ストックをいかしたウォーターフロントのまちづくり」

掲載誌：『港湾』（日本港湾協会）

発行年月日：2023年9月20日

■ 准教授 山崎 晋

建築計画・都市計画分野と福祉のまちづくり
研究の取組み

掲 載 誌：『福祉のまちづくり研究』Vol.25,
No.1(日本福祉のまちづくり学会)
発行年月日：2023年 6 月15日

■ 特任教授 小木曾 裕

日本における都市公園の太政官布達から現在
までの150年の計画・設計の変遷

掲 載 誌：『区画整理士会報』（全日本土地
区画整理士会）
発行年月日：2023年 7 月25日

【新聞に掲載】

■ 教授 岡田智秀

建設通信新聞「海の日特集：港湾と背後地の
連携図り、新たな“みなとまちづくり”を」

掲載年月日：2023年 7 月14日

■ 特任教授 八藤後 猛

朝日新聞「子どもの転落、春から増える傾向
専門家が訴える大人がすべきこと」(研究デ
ータの解説と記事へのコメント)

掲載年月日：2023年 3 月29日

■ 特任教授 小木曾 裕

読売新聞（東京朝刊）（4 面）政治・経済
「地方再開 UR 存在感 採算・にぎわい両
立目指す」(取材記事)

掲載年月日：2023年 9 月 4 日

■ 准教授 押田佳子

読売新聞（東北版）「観光防災特集」(観光危
機時における観光客への情報提供のあり方に
関してコメント掲載)

掲載年月日：2023年 9 月16日

【その他】

■ 3年 石井麻翔

フットゴルフワールドカップ2023 日本代表

開 催 地：米国フロリダ州レイク・ブエナ
ビスタ エバーモア・ゴルフリ
ゾート、ウォルトディズニー・
リゾート
日 程：2023年 5 月27日～6 月 6 日（現
地時間）

フットゴルフジャパンツアー2023-2024
太田カップ 2 位

主 催：日本フットゴルフ協会
開 催 地：鳳凰ゴルフ倶楽部
日 程：2023年 8 月27日

Japan FootGolf League 2023 優 勝
(チーム：Novaflug A)

主 催：日本フットゴルフ協会
開 催 地：鳳凰ゴルフ倶楽部
日 程：2023年 9 月16日、17日

随時情報を八藤後・牟田へメールでお寄せください。なお、本年度の学会等での発表は、次号（3 月発行予定）にまとめて掲載します。

土木学会賞研究業績賞受賞にあたって

このたび、「近世都市における都市設計論理と水辺空間の
変遷に関する研究」が土木学会賞研究業績賞*を受賞いたし
ました。

わが国の諸都市はおおむね、近世に開かれた都市を基盤と
して発展してきました。そして、その多くは、「水の都」と
称賛されるほど豊かな水辺を誇る都市でした。ところが、そ
れらの都市がどのような論理で設計されたのか、その設計論
理は明らかになっていません。この研究は、そうした近世都
市の都市設計論理を解き明かすとともに、とくに水辺空間に
着目し、近世から現在に至る変遷を読み解いたものです。現
在、まちづくりの分野においては、都市空間の再編や水辺空
間の再構築に対する関心が高まっています。今後、まちづく
りの技術者が向き合う諸課題に対して、この研究が本質的な
解を導くための一助となれば幸いです。

さて、この研究テーマは、私が卒業研究以来四半世紀にわ
たり取り組んできたものですが、本賞においては、とくにこ
の10年間の研究業績が評価されました。まさしく、まちづく
り工学科とともに歩みを重ねてきた研究が評価されたことに
なります。こうした研究は、いわゆる歴史研究に位置付けら
れますが、工学系分野において歴史研究を続けることは容易
ではありません。「そんな研究に意味があるのか?」「いった
い何の役に立つのか?」といった、真正面から答えることが
難しい厳しい批評にさらされます。それでも研究を続けるに

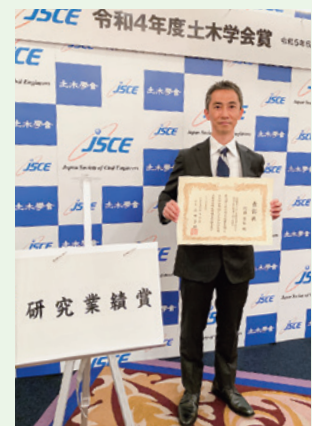
は、よほど辛抱強いのか、よ
ほど研究環境に恵まれるか
のいずれかでしょう。私の
場合は、紛うことなく後者
でした。

まちづくり工学科は、教
員はもとより学生も、既成
の学問分野にとらわれな
い、いわば学際的な研究に
取り組む意欲に満ち溢れて
います。そうした環境のも
と、のびのびと研究に取り
組むことができたことが、今回の受賞につながったと確信し
ています。まさに、新設学科の面目躍如といえるでしょう。
ここに、ともに研究に取り組んでくれた学生や、サポートし
てくれた教職員の皆さんに、心より感謝いたします。

この受賞が、まちづくり工学科において、本質を突いた面
白い研究が次々と生まれる助勢となれば幸甚です。

※土木学会賞研究業績賞は、研究、計画、設計、施工、考案などに関す
る一連の論文等の業績により、土木工学における学術・技術の進歩、
体系化に顕著な貢献をなしたと認められる個人に授与されるもので、
生涯に一度しか受賞主体となることのできない賞です。

阿部貴弘 教授



編集
後記

本号ではまちづくり工学科10周年特集の第一弾として、創設にかかわった先生方による座談会の様子を掲載しました。10年が経過しましたが、
その間に過ごした時間はあっという間で、密度の濃いものでした。このように充実した時間を過ごせたのは、本学科に入学してくれた在校生や卒
業生の皆さん、そして多くの支えてくださった方々のおかげです。本学科は理工学部内では歴史が浅く、まだまだ若い学科です。とはいえ、それ
を強みに、今後も学生とともに学科、そして学部を発展させていこうと改めて決意ができた、そんな号になりました。
(牟田聡子)